兼谷先生を悼む

百済　　勇
（外国語部長）

過日，西日暮里に用事があり，そこから地下鉄「日比谷線」を利用して大学に戻って来た。途中「根津駅」を通過するとき，私の心にこの駅でおりて日本医科大学付属病院に入院中の兼谷英夫先生を度々訪れた当時の強い印象がこみあげてきた。外国語部は，玉川校舎で非常勤の先生，教務部の職員と合同のソフトボール大会をよく行っていたが，その中心的役割を担ってくれたのが兼谷先生であった。それゆえお見舞いの時の話題は，いつも来年度のソフトボール大会の事であった。先生は，これまで開催までの組織化は勿論のことゲームそのものに積極的に参加して下さった。だから会っていてもこうした日常的な話題が主だった。楽しい時間であった。あるとき兼谷先生は，「百済さん！　研究室の本が，埃をかぶっているのですよ。なすべき事がまだあるのですよ！」とポツリと私に言葉をかけてきた。私は，言葉に詰まりぎこちない返事をしたことと思う。とゆうのは私的な事で恐縮であるが，当時私の兄も同じ種類の病気で手術をして入院中であった。兼谷先生のご病気については詳しくは知らない私ではあったが，「短くて３カ月，長くて６カ月」と宣告されていた私の兄の病状と重なり，やり場のない気持ちであった。先生が，イギリス留学中にオーストリア及びドイツにおられた吾妻先生及び野島先生を訪ねられ，チロル地方の山々を一緒に登られた写真を見せてもらっていただけに，とにかく元気になられて優秀な研究者及び教育者として再び駒沢大学に復帰してくださる事を心から祈るのみであった。

今年度の前期の最後の週に，「兼谷先生追悼ソフトボール大会」を開催したいと同僚たちと話し合っている。外国語部が組織されて約18年の月日を経ているが，様々な伝統が定着し始めている。かかる伝統の定着に大きな役割を果た

された諸先生の一人が兼谷先生であった。それゆえこの「兼谷先生追悼ソフトボール大会」の開催は，単に「追悼」のみならず約250名の専任・兼任教員が所属している外国語部のさらなる発展のための一つの契機にしたいと思っている。兼谷英夫先生に対して心からのご冥福を祈る次第である。

兼谷さんへのレクイエム

石　原　孝　哉
（英語主任）

テレビが上ずった声で三社祭の熱気を伝えています。そういえば，一諸に揃いの半纏で御輿を担ぐのが，あなたとの約束でしたっけ。来年は，来年はといいながらいつしか時はすぎ，この春にはもうあなたはおりません。

枯葉の頃に，あなたの研究室の整理をはじめて，新緑の今になっても，仕事は遅々としてはかどりません。あなたの愛着のあるものを捨てるのが気がひけて，なかなか一挙には片付かないのです。

この間，あなたがネザー・ストーウィからくれた葉書がみつかりました。あこがれのコウルリッジゆかりの地での感動と喜びが，せまい紙面に踊っています。あの田舎の村のコウルリッジ・コテッジなど，普通の旅行者には，どこにでもある田舎屋にすぎないのですが，あなたにとっては夢にまで見た所でしたものね。「老水夫の歌」，「クリスタベル」，「四阿は牢獄」など，あなたが追っていた詩は，みなここで書かれたわけですから。今でもはっきりと覚えているのですが，このサマーセットのA39号線はひどく曲りくねった道路で，本当に運転者泣かせの難所でした。光る海と白い肌の広葉樹の林，それにムーアを渡る風の音，そんななかでコウルリッジは「老水夫の歌」を書いたのですね。老水夫の船出した港は，ここからちょっと西のウォッチエットで，その近くには老水夫の船にボートを寄せた水先案内人の港マインヘッドもあったと思います。ネザー・ストーウイも，ウォッチエットもマインヘッドも本当に何もない所な

のに，あなたにとっては，まるで巡礼の聖地。あなたの興奮ぶりが手にとるように伝わってきます。

去年の今頃，英国から帰国したばかりのあなたはコウルリッジ・コテッジのことを目を輝かせて話してくれましたね。時計だけが時を刻んでいるあなたの部屋ですが，今日は思いきって整理します。あなたの魂が，三社祭にうかれているときか，ネザー・ストーウィに遊んでいるときが，僕も気が楽だから。

さようなら兼谷さん。

兼谷さんの想い出

河　内　賢　隆
（英　　語）

英語科スタッフの中で三番目に若い兼谷さんが，突然逝ってしまったとは，運命のいたずらとはいえ，六ケ月過ぎた現在でも，未だ信じられない気持です。時間割担当という役目柄，六月下旬に代講をたてた時には，本人は十月頃には手術の傷も大方癒え，何とか学生の前に立てそうであるといっていたものゝ，膀胱腫瘍という厄介な病気だけに，年内は無理ではなかろうかと内心不安な気持でした。でも，まさか忽然とこの世から姿を消してしまったとは全く言葉がありません。あの元気な，一番長生きしそうだった兼谷さんが……。最後にお会いしたのが，たしか亡くなる五日前でした。組合からのお見舞を持ち，肌寒い十月の雨の中を千駄木の日医の附属病院に見舞った時でした。熱にうなされ，意識は朦朧としていましたが，私が来たのがわかり，一分程言葉を交わし，「あんた駄目だよ，ワイシャツはきちんと着なくっちゃ」といって，いつものように私の折れ曲ったワイシャツの襟を直してくれた仕草が未だ脳裡に焼きついて離れません。この時が最後のようで，その後意識は混濁し，回復の見込は全く断たれたのでした。十月十日示寂，享年四十歳。二年前，教授に昇格し，若いだけにこれからと嘱望されていただけに全く残念です。

昭和二十二年，下町，葛飾の堀切で産湯につかり，地元の堀切小，中学校から修徳高校へ進み，更に駒沢大学の学部，大学院（博）を卒へ，そのまま母校の教壇へ立ったのでした。現在の台東区千束へ移ったのが昭和四十三年。いわば生粋の下町っ子で，その性格も育った環境のせいか，気風が良く，むしろ宵越の金が持てない部類でした。趣味は多い方だったかも知れません。特に飲んで，騒いだ時には，「寅さん」が出てくるのでした。又，祭にはとりわけ目がなく，五月中旬に行われる三社祭には必ずといって良い程，参加していたようです。歳の瀬には，浅草っ子らしく御酉様に詣うで，家族揃って新年を迎えたのです。スポーツに関しては，不自由な体にもめげず，水泳や登山をはじめ，何でも器用にこなし，とりわけ野球は我を忘れて夢中になる方でした。観戦の方も，劣らず熱中する方のタイプで，神宮のスタンドで大声をあげ，駒沢野球に声援を送る姿はまさに兼谷さんそのものでした。本人の性格と育った環境のためでしょうか，しかつめらしい大学教員にあって実に庶民的な面を持ち，誰とでも気軽に話す，気さくな先生でした。それだけに交友範囲は広く，職人さんから，政治家に到る迄様々の人と付き合っていた様です。

そもそも兼谷さんとの出会いは，私が三十六才で大学院に入った時でした。その関係は十三才年下の一年先輩という妙なものでした。それ以来不思議な縁で，大学院の修士，博士課程と共に机を並べ，卒業後も職場の同僚という関係になり，都合十六年間の付き合いでした。その間因縁とでもいったらよいのでしょうか，修論がそれぞれ十九世紀のコールリッジとギッシングで，共に田中準先生に指導していただき，二人で船橋の自宅迄伺い，昔の貴重な英文学の裏話をお聞きしたのでした。とりわけ，『ポエチカ』の話は二人だけが共有した大切なものでした。

さて，仕事の上でも兼谷さんとの結びつきは深く，『同一性の寓話』と『シェイクスピアの背景』の共訳は忘れ得ぬものとなってしまいました。今ここで，その時のことを思い浮かべながら故人を偲んでみたいと思います。勿論，『同一性の寓話』に関しては，訳者十一人を四グループに分けた一つに，兼谷さんと古富さん，私が属していたという意味です。仕事の手順としては，我々三人

がお互いに議論を闘わせながら粗訳し，文章を練り上げ，推敲を重ねながら進んでいったわけですが，それぞれの態度としては古富さんがむしろ中間的立場をとったのに対し，私と兼谷さんの態度はかなり対称的でした。私の場合，これはたぶん高校教師生活が長かった為と思われるのですが，そのアプローチの仕方はスクール・グラマーを通した語学的な方法だったのです。したがって，つい瑣末な点までも気がまわってしまうのです。一方，兼谷さんはコールリッジを研究対象としているだけに，私とは正反対で，既に自分の頭の中にある神話の世界に浸りながら，その繊細な詩的想像力を働かせて，こなれた文を訳し出すのでした。時にはスクール・グラマーを無視することさえありました。このような時には，あの粗忽で，気短かな兼谷さんに代って，感受性の強い内省的で詩的情緒を重んじる兼谷さんを見ることが出来るのでした。それだけに，お互いに妥協出来ず，時には厳しい雰囲気に包まれて，僅か数行を訳すのに，延々数時間もかかることがありました。夜十時頃迄続き，お互いに納得出来ず次回迄の宿題となってしまったことが何度あったか知れません。それだけに，今となっては忘れることの出来ない貴重な想い出となってしまいました。その点『シェイクスピアの背景』の場合，その方法は『同一性の寓話』と同じだったのですが，不思議な程，お互いの態度を理解し合いスムーズに進みました。二人だけで冗談をいいながらやっていたせいかも知れません。でも今となっては，その態度はどうも何か悟りの境地に達していたように思えてなりません。

最後になりましたが，ここに兼谷さんがコールリッジの末裔にあたる婦人に会った時の，感動的な喜びの手紙を紹介します。なお，その消印は奇しくも亡くなる，丁度一年前の十月十日になっていました。「三月から九月いっぱいの間に，約五十日間旅をしていました。その間，思わぬ収穫がありましたが，何と言ってもデボン州のオテリ・セント・メアリーのマンナー・ハウスでレィディ・コールリッジに会えた事，一時間程話をして来ました。さらにサマーセットのネザー・ストウィにコールリッジ・カテジを訪れた際，そこに住む，それはそれは美しい女性（我がチーチャン程ではありませんが）にコールリッジが作品等に言及している場所を特別に案内してもらいました。二人で町の中を歩

きながら，当時を互に想像しながら二時間程話をして来ました。帰る時，そこで行われるコールリッジの集いに招待され，10月24日に出席するつもりです。予想外の事でした。」（原文のまま）

追悼　故兼谷英夫先生

中　尾　俊　光
（英　　語）

今，このように先生の追悼文を書き記していることが不思議に思えてなりません。「追悼」の言葉が，どうしても私には腑に落ちてこないのです。

昨年三月，一年間の滞英生活を終えて帰国され，久しぶりにお会いした時，先生の「随分スマートになったでしょ」という明るい言葉に，何の疑いを抱くことができたでしょう。相変らずの生活に慣れきった我身に比らべ，むしろ先生に健康体を見る思いでした。また，久しぶりに杯を傾ける折にも，その量が減ったのは，むしろ適量とさえ思えたのです。

五月に入り，私の研究室での雑談後，部屋を出る前に，「どうも腰の上当りが痛むんだ」と，右手を添えながら身を捩る仕草をされたことが，奇妙に印象に残っています。しかし，当時は，それも外国生活での疲れのせい，とぐらいに考えていたのです。すべて，留学前の先生の姿から抱いていた一つの思い込み――身体上のご不自由にもかかわらず，自らの意志で鍛えられた立派な体格と，生来の明るさを合せ持たれていた，一つの先生像というべきものが，「病」などというものを思いつかせる余地を与えなかったのでした。

やがて五月も下旬になり，突然，英語科教室会議が招集されました。その席上，先生の入院及び手術の予定が報告され，初めて事の重大さを知らされたのでした。それでも，「病院側の説明では，後期授業には必らず出講できるとのことですので」という先生ご自身の言葉を，文字通りに，当然のことと理解していました。ただ一点，「病名」についての説明の中に疑念を抱かせる部分が

あったことは事実でした。

その会議の後で，研究室においでになった先生は，手術の内容について多少詳しい説明と，手術後の予想を話されました。これは容易ならぬ事態であり，先生には，手術後はこれ迄とは大いに違った生活様式を余儀なくされることになるのではないか——これがこの時の私の卒直な感想でした。

しかし，それでもこの時点では，職場復帰は前提であり，後期授業に向けての見通しについて話し合ったと記憶しています。先生は努めて平静を保って話されておられた様子でしたが，私の方は無意識のうちに身を固くして話を伺っておりました。

そして入院，約一ヶ月にわたる検査の後，七月初旬に手術を受けられたのでした。手術前にお会いした時には，然していつもと変りなく，ただ衣類を着替えてベッドに就いているという様子に見えました。いつもながらの軽い冗談を交わし，あとは順調な手術と回復を念じつつ病院を後にしました。

手術後，病院への見舞は暫く控えさせていただき，かわりに電話でその後の経過をお尋ねしたところ，奥様より，思わぬ長時間（予定時間の約二倍）に及ぶ手術であったことを知らされました。その約一週間後，まだ面会は無理かも知れないと思いつつも，数日後に迫った海外研修の為に日本を出発しなければならないという事情もあり，その前に是非お会いしておきたいと思ったのでした。長時間の手術を受けられた先生の表情には，やはり疲労の色が現われておりました。私は，ひと月後には先生の順調な回復と元気な姿に接することができることを楽しみにしながら，海外研修に引率者として同行したのです。

八月下旬，面会に参りましたが，何故か重苦しい気分に駆られ，ともすれば会話も跡絶えがちになりました。食事がすすまないということも伺いました。それでも先生は精一杯の明るさを見せようと努力されているのがわかりました。先生ばかりではありません，いつも付き添っておられた奥様も努めて明るく振舞っておられました。病室の外では，目にいっぱい涙を浮べながらも，ドアを開ける直前にはすっかり涙を拭い，一歩部屋に入るや否や，にっこりと笑顔を作っておられた奥様の姿に，私は胸が締めつけられました。

やがて暦は九月に入りました。週に一度の面会に向う途中の足取りがどんなに重く感ぜられたことでしょう。しかし，お会いすれば，先生の「元気になろう」とする気力を見せつけられました。時折り，思い出したかのように，右手で，ベッドの傍の把手をしっかり握って，横たえた身体を奮い起こされました。「こうして起きられる間は大丈夫だ。」——それはご自身を勇気づけ，激励された言葉だったのでしょう。私は，その姿の中に，先生の真骨頂を見る思いがしました。これこそが，今迄の先生の全てを支えてきたものなのだと確信しました。この，右手を頼りに身を奮い起す動作は，その後も度々見るところとなりました。恐らく，痛み止めの薬のせいと思われますが，時折意識がとぎれる中でさえも，身を起そうと……

生きたかったに違いない，何が何でも。文字通り，石にしがみついても生き続けたかったに違いありません。最愛のご家族を残して逝くなどということがどうしてできましょう。留学中に収集された資料を以って，さらに究めようとされていたご研究をどうして諦めることができましょう。それにもかかわらず，昨年十月，先生はついに病を克服できず，帰らぬ人となってしまわれました。無念の思いでいっぱいであったことでしょう。

今年もまた，花咲き，緑あふれる季節を迎えました。とりわけ，花と緑の自然を愛されていた先生は，昨年のこの季節をどのような思いで眺め，またお過しになっておられたのでしょうか。この時期には，例年，学会に出席することを楽しみにされていたことが，なつかしく思い出されます。

先生は，物事に対処される時にはいつも一生懸命でした。研究，学生指導，各種委員会，組合，そして懇親会のソフトボール大会——いつも全力投球でした。

兼谷英夫先生には，何よりもこの力いっぱい，無我夢中の姿がよくお似合いになりました。　　どうぞ安らかにお眠り下さい。　　合掌

東チロルの兼谷英夫君

吾　妻　雄次郎
（ドイツ語主任）

彼の思い出が鮮明に残っているのは，東チロルの Matrei（マトライ）での数日である。ウィーンの南駅から列車で6時ばかり，もう30分も走ればイタリア領というところに，Lienz という小さな駅がある。左手，つまり南側には，峨々たるドロミテの山々が険しい山肌を下界に曝している。ここから黄色いポストバスで Drou 川の支流 Isel 川沿いに50分ばかり上った標高1000米ほどの盆地に，保養地 Matrei（マトライ）の小さな家並が，ゴチック様式のプァル教会の周りにつつましく立並んでいた。私は6月3日，2年間の契約で，日本の或る私大の独文科に客員教授としてすでに赴任した若い友人Wの母親の招きで，山歩きの旅姿で彼女の経営するペンジョンに投宿した。ミュンヒェンの野島君には行先きを連絡していたが，いかに好奇心旺盛な彼も，イギリスからの珍客・兼谷君の来訪ではチロル体験も断念せざるを得まいと思い，周辺の山々の独り歩きを決め込んでいた。翌日は，今にも泣き出しそうな空模様にも拘らず，更に枝分れした峡谷沿いのバスの終点 Hinterbichl で下車し，雨に煙る山々を眺め，皇帝のような高貴な顔をした茶班（マダラ）の牛たちと遊び，滝や川沿いの大雪渓に目を見張りながら，もう目の前の山々の向うはイタリアというところまで歩いた。雨は午後になって激しさを増した。山肌は次第に雲に蔽われ，ますます激しくなってきたので，ハムやチーズをはさんだゼンメルを缶ビールで食べ，殆ど同じ道を引返えして，予定を早めて宿に帰った。すると Martha 夫人が，あなたの同僚（コレーゲ）から電話があって，今頃はバスでこちらに向っている，同僚は2人のようだと言った。もう到着する時刻だったので，慌ててターミナルまで迎えに出た。野島君の後から，いつもの陽に焼けたような黒い顔の兼谷君が，白い歯を見せながら，ヤッケにニッカズボンの姿で降りて来た。

翌日，周囲の山々は雪で白く蔽われていた。兼谷君はここの靴の専門店で山靴を買った。手の不自由だった彼は，手伝おうとする周りの申し出を断って，歯を巧みに使って自力で靴紐を通した。Wの妹の Karin が，朝の勤めの前に Isel 川の上流の Tauernhaus まで，愛用のポロで送ってくれた。私たちは帰りの時間を計算に入れ，かなり奥まった Innergeschlöß の Benedigerhaus まで，なだらかな山道を，昨夜の新雲に蔽われた山々に吸込まれるように登って行った。

いま手許に，3人が写した幾葉かの写真がある。ペンジォンのテラス。庭の林檎の樹の下の3人。家族と一緒のもの。山道を歩く彼のうしろ姿。セントバーナードと並んだ彼の笑顔。……林檎の樹の下に佇みながら，彼は突然，相手が悪いや，と言って微笑んだ。そして「……やさしく白き手をのべて，林檎をわれに与えしは……」と藤村の詩を口ずさんだりした。この時もう病魔が彼を蝕み始めていたのかも知れない。後に聞く異常な徴候が起きていることが，若しこの時分っていたのなら，一刻も早く日本に帰ることを勧めるべきであったと悔まれる。でもおそかれ早かれたまた君と会うことになるだろう。

兼谷さんのこと

竹田正純
（フランス語）

兼谷さんが外国語部教授会のメンバーになられたのは，文学部から私たちが独立して数年を経たころのことだったと思う。外国語部に入って来られたころ二三度酒席を共にしたときのことが思い出される。おそらく私のことだから，かなりいい気なおしゃべりをいっぱい聞かせたのではないだろうか。いま考えると赤面の至りであるが，ともかく彼はそういうとき，終始，にこにこと目を細めていて，あの独特な響きのやさしい声で受け答えをしてくれた。言葉の端々に人を気遣う気持ちが鈍な私にも感じられた。やさしい人だなという印象を

そのころ私はもったものである。ただ，兼谷さんとしては年上の者を立ててくれたにすぎなかったのかもしれない。しかし私は，それ以後ずうっと，兼谷さんについてはあのころの印象をもちつづけることになった。

衆人承知の，兼谷さんの頑張り屋ぶりについては他の人も書かれるだろうが，彼はやさしいばかりでなく，大変な努力家であった。英語の先生方ほど身近にいなかったので彼のほんの一部に触れることしかできなかったが，努力家の兼谷さんについては非常に印象深い光景を目にしたことがある。いまから五，六年くらい前になるだろうか，外国語部主催の懇親ソフトボール大会でのことだ。私はその年にはじめて参加したのであるが，キャンパス裏の電通のグランドでおこなわれたゲームで見た彼の美技に私は大いに感動したものだった。兼谷さんについて語るときこれを言うことは許していただかなくてはならないが，彼は手が不自由だった。ボールを捕るとき，隻腕の彼は右手にグローブをはめ，捕ると素早くあごにグローブをはさみとって，また同じ右手で投げ返す。彼はその右手のほうもあまり自由ではなかった。しかし彼は，こうして五体満足な者たちをつぎつぎにアウトにとっていった。打者としても，右手一本で何本もヒットをかっ飛ばした。

ほんのしばらく前，アメリカの学生野球で隻腕の名投手が話題になったが，兼谷さんは，それ以上の身体的な悪条件のもとで，私たちを感動させたのだった。たしかに私たちの多くは，お世辞にも運動神経が発達しているとは言えないし，そのころでもすでに半数以上の者は中年に達していた。兼谷さんの敏捷さと美技が一際目立つのは当然としても，私はやはり感動せざるをえなかった。そのとき私は彼の少年時代を想った。すぐれた運動神経に彼は恵まれていたようだが，しかし，大変な努力家であったことは確かであろう。少年時代にもおそらくあの同じ美技でもって周囲の者たちを瞠目させ，感嘆させたことだろう。聞くところによると，彼はまた水泳も人一倍うまかったという。そして学生たちの熱心な先生であったし，私たちの良き同僚であった。私は門外漢なので直接には知らないが，自分の研究分野でも大変な努力の人であったと聞く。こう言うと人は誤解するだろうか——彼にとって，努力したり頑張ったりすること

は，ひょっとして何でもないことではなかったのではないか。

しかし，このことが兼谷さんの寿命を縮めてしまったのである。病気でさえ，努力で，あるいは頑張りで征服できると考えていたのではないか，と私にはおもわれてならない。とんでもない間違いである。天国ではそういう考えはなしにして，ゆっくりと休養をとってほしい。兼谷さんが人生をもう少しいい加減に生きることを知っていてくれればよかったのに，としきりに悔まれるのである。ご冥福をお祈りする。

兼谷さんの逝去を悼む

中　村　璋　八
（中国語主任）

兼谷さんの逝去の知らせは私にとって全く突然であった。兼谷さんは，前年四月から一年間，イギリスのケンブリッジ大学での研究を無事終え，四月から再び駒沢大学の教壇に立たれ，学生の指導に当り，傍らイギリスでの研究の成果を纒めておられた。その途中，腎臓結石の手術のため入院されるとお聞きした。実は私も，六年前に腎臓結石の手術を経験していた。その時の手術は必ずしも安易なものではなかったが，手術後，二週間程の入院と，その後の漸くの静養で完治とは言えないものの通常の生活をしており，兼谷さんと時を同じくして中国の復旦大学にも留学し，復旦大学の要講にも応じて講義をも担当し，遠く四川省の大学にも講演や集中講義にも出掛け，時間の合い間には中国の各地を一人で旅する迄に体力も快復した。還暦を越えた私でさえ，そのような状態であるので，四十歳の兼谷さんにとっては腎臓結石などは全く問題のない病気で，直ぐに全快され，またお元気な姿で大学に戻られ，親しくお話ができると確信し，さして心配もしていなかった。

その兼谷さんが，昨年十月十日，入院先の日本医科大学附属病院で不帰の人となったと言うことをお聞きし，私はただ呆然として信んずることはできなか

った。腎臓結石だけでなく余病もあったとのことであるが，それにしても人生の最も充実した四十歳の若さで再び会うことが出来なくなってしまうとは思いもよらないことで哀しみに堪えない。

兼谷さんは，昭和五十年に駒沢大学大学院を修了されたが，私も昭和二十三年に旧制の駒沢大学東洋学科を卒業している。所謂同僚であると共に，その卒業年時は遠く離れているが先輩，後輩の関係でもある。しかし，兼谷さんは英文学，私は中国学と，その専攻が異っているため，親しく意見を交換する機会に恵まれていたとは言えない。だが，教授会や各種の委員会，そして学内でお会いする機会は多かった。兼谷さんの専門である英文学や英語教育に関する数々の業績の詳細な内容に就いては，不勉強で門外漢の私には解らないが，教授会やその他の場での発言を拝聴すると，学問に対する態度や物の考え方は良く理解できる気もする。それは，何事に対しても誠実であり，真摯であって，全ての人々に思いやりがあったことである。

家庭にあっても，それは全く同じであったであろう。ご令室も若く，お子様もまだ成長の最中である。これらの家族にこの上もない深い愛情を注がれていたであろう。そして，ご自身の研究もこれから限りなく発展されたであろう。これらの愛しい家族や途中まで進展した研究を残して，この世を去らなければならなくなった兼谷さんは如何に無念であったであろうか。私達に取っても掛け替えのない兼谷さんを失ったことは無念の一語につきる。しかし，人生は無常である。無力な私達には如何とも成し難い。たゞたゞ残された家族のご健康とお子様のご成長と，兼谷さんのご冥福をお祈りするばかりである。

兼谷先生を偲んで

佐　藤　玖美子
（スペイン語主任）

今想い出してみると，残念ながら私は兼谷先生と長く言葉を交した記憶がな

い。それなのに，私は先生から二つも頂きものをしている。一つは湯呑みで，これはある時先生が湯沸し場で洗って居られるのを見て，私が「まあ素敵な湯呑みですね」とうっかり言ってしまったことにある。先生は「これは親父の店で記念品として作ったものです。一つ差し上げますよ」と言われて，すぐその翌日立派な箱に入ったのを持って来て下さった。良い方だなあ，とまさかと思っていた私は感激した。もう一つは，兼谷先生が駒沢大学N・フライ研究会で共訳されたノースロップ・フライ著“同一性の寓話”で，これはきれいなサイン入りで頂戴した。各種委員会や組合の仕事をてきぱきとこなされていた先生だったが，学者としても前途洋々たる方であることは間違いなかった。ケンブリッジ大学で勉強された成果を実らせることなく早世され，先生ご自身どんなに残念でいらしたことであろう。

研究館のエレベーターの中でお会いしたり，廊下ですれ違ったりする時，先生はいつもていねいに挨拶され，本当に礼儀正しい方だと感心していた。先生に最後にお会いしたのも研究館の廊下だった。他の先生とお話中だったが，いつものように深々と頭を下げられた。私はその時，先生のあまりの顔色の悪さにびっくりした。しかし，ご病気のことは少しも知らず，留学から帰られたばかりで疲れが残って居られるのだとばかり思っていた。先生がそれ程体を悪くされていたということは，不覚ながら少しも知らなかった。だから先生の凶報を受けた時はあまりの驚きに声もなかった。後期の授業が始まり，教授会ではいつも私の遙か正面の窓際の席につかれる先生のお姿に，再び接することができるとばかり思っていた。

黒いリボンに飾られた先生の写真は，健康そのものの少年のような笑みを浮べておられた。写真のガラスを破って，先生の白いボールの一投がこちらに向って今にも飛んでくるようであった。

心から先生のご冥福を祈る。

真剣に全力投球

杉　山　秀　子
（ロシア語）

兼谷先生の想い出は今となっては断片的なものである。一度教授会の終った後の組合の班会で突然席を立って，「私，書記長をひき受けてもかまいません。」と言われたことがあった。時折しも学長公選前の困難な時代であり，自らすすんで書記長をひき受ける人は皆無であった。この意表をついた兼谷先生の発言は周囲のものを多いに驚かせたのである。その時の感じが大学のためなら捨て石になっても構わないという一徹ではあるが，何か一抹の悲愴感が漂っているようで忘れることの出来ない一場面となっている。結果は幸か不幸か，兼谷先生にならなくて済んだのだが，周囲に波紋を起したのは事実であった。普通は囲りから推されに推されて重い腰をあげるのが定型であったが，その時の兼谷先生の型破りな発言は，私には新鮮にすら感じた。これと同じようなことが酒席の場でも何回かあったようである。酒を飲んでいようがしらふの場合であろうが，割と歯に衣を着せずズバリとおっしゃっていたようだ。また人徳のせいか，それが余り人に不快感を与えるようなものではなかった。

ある時，私は生れてはじめてカラオケ・スナックなるものを兼谷先生達と同行させて貰ったことがあった。そこで自分の持ち歌を一曲ずつ唄うことになり，兼谷先生は何の歌だか忘れたが，随分むずかしい演歌を真剣に思いのたけ唄われた。私もロシア民謡を一曲唄わされたが，その様子を中尾先生がじっくり観察されていたらしく，「杉山先生は随分まじめな方なんですね。」と，ひやかされたことがある。もちろんその時の兼谷先生の真剣さには及びもつかなかったのであるが。何事にも真剣に精一杯たちむかっていらした兼谷先生の姿が今でも眼に彷彿とするのである。

——兼谷先生の御冥福を切に祈る。合掌。

境遇を超えて

坂本　　武
（文学部英米文学科主任）

“Nothing is impossible to a willing mind.” 私はこの名言そのまゝを，今は亡き兼谷英夫先生の駒大生時代に面(ま)の当にし，その印象の強烈さを忘れ去ることができない。恐らくそれは，今後も決して私の心から消え去ることはあるまい。

昭和42年８月，彼が駒沢大学文学部英米文学科三年生，当時ＥＳＳの役員として夏期合宿に参加中のことであった。折しも，私はこの会の部長として行動を共にしていたが，身体的に必ずしも他学生と同一でないにも拘らず，常に明るく元気に振舞っていた彼に深く感じ入るところがあったのである。

某日，野球の練習試合が企画され，上級生メンバーの中になんと彼の名が左翼手として記入されているではないか。この時の私の驚き。更に，それに倍する文字通りの驚愕が私を襲った。それは守備についた彼の動作であった。何不自由のない他学生ですらとても及ばない程の俊敏かつ完全な動きがそれであった。動作に加えて，見るからに野球を楽しんでいるその風情にも強く惹きつけられ，一体彼のどこにそのような明るさ，強さがあったのか，と再三自問せざるを得なかったのである。「喜んでする人に不可能はない。」 正に至言である。

この事があってから，私は彼に対する，少くとも他人に対するのとは異なった見方，感情を捨て去るのに吝ではなかった。反対に，常に常人と少しも変ることなく，しかも明るく日々を送っていた彼に対し，畏敬の念すら抱いていた。“Will is power.” 「意志は力なり。」の言葉と併せて考えるとき，今は亡き彼から教えられた点の余りにも多かったことをおもう。それにしても，若くしてまた突然不帰の客となられた彼のことをしみじみ想い，一筆記して心からその御冥福をお祈りするものである。合掌。

ロマン詩人の旅立ち
——兼谷英夫教授に——

河　崎　征　俊
（文学部英米文学科）

ネーザストーイから詩魂を求めて
急ぎ天翔る詩人の魂
季節のやさしさを胸いっぱい吸い込んで
この大地に降り立った詩人の魂

雨が降っても
風が吹いても
霧が立ち込めても
オリーブ畑のかの聖霊は
いつも……
決して　決して
夢遊人に心を閉ざすことがない
ロマン詩人の旅立つこの夕べは
誰がみても　海原のごとくたゆたう
瞳の天球なのだから

この国とかの国を
コンパスで結びつけた偉大な魂よ
決して　決して
この大地に眠ることなかれ

わが胸を Lethe とすることなかれ
そう！　君の魂は
オーバンからナイーンをめぐって
中世の古びた館を浮遊し
かの詩人の詩行を吟じながら
かの西国に安らぎを覚えたのだから

聖人の列に加わった
偉大な不滅の魂
――まるでダン流の巧みさを操るかのごとく

ギリシアの壺に描かれた
甘い香りの女神
カンブリアに群なす
愛のダッフォディル
詩人は忘れることはなかった

詩人はこの大地に降り立って
山の端(は)に時点をとらえて　叫んでいる
「至福千年」
「至福万年」
呼びかけし君の魂は
どこまでも透明なクリスタル

この瞬時をエターニティに転じ
わが魂を復活させる君の魂
どこまでも　はてしなく
不滅を求める君の魂

聖杯伝説を信じながら
ジョンソンの子孫たちに
手をさしのべている君の魂

いい人なんだね

岡　本　　誠
（短大英文科主任）

兼谷さんとのつき合いは野球を一緒にやることで始まった。そういう人は他にもいらっしゃると思う。彼は町内の早朝野球もやっていたと聞いている。それほど兼谷さんは野球好きだった。不自由な身体にもかかわらず，器用にダイナミックにこなすプレイに感心したものである。相手は出版社だったり附属高や園芸高の教員チームだったりした。彼が投げるときもあったが，私も，肩がいいのか握力65キロのせいか，タマが速いということで短軀（タンク）を戦車（タンク）にして投げもした。私が打たれたりしたとき，バックスにいる彼が「ドンマイ，ドンマイ」と元気づけてくれた声が今も耳に残っている。

しかし，彼とよく話す機会をもったのは，なんといってもともに入試の出題委員をやったときである。このときの出題委員は，お酒が飲めることで選ばれた，と思えるほど飲み助がそろっていた。私以外は。やれ問題の検討，やれ校正と，顔を合わすたびに帰りにちょいと寄ってはのどを潤すのである。兼谷さんも酒はけっこういけた。この道草は当然談論が風発する場となり，我々はそれを愉しんだ。そういったある晩，突然彼が私に「岡本さんていい人なんだね。オレ誤解してたよ」と言ったのである。

彼はそもそもは福島の出身ということらしいが，育ちは東京下町で，祭り好きの彼の性格にはこの地域の人間らしい気のいい直情さがあり，それが小気味よかったものだ。どういう誤解が彼にあったかはともかく，私は理解者が得られた気持になり，素直に嬉しかった。

昭和62年，私は教職員組合の執行部委員をやっていたが，折しも定年制の問題が焦眉の急となっていた。この件につき各学部との懇談会を次々持った際，5月6日の外国語部との集りでイギリスから帰ってきていた兼谷さんと久しぶりに会った。なんとなくさえない様子に見受けられ，声をかけると，「調子が悪いんだよな—」と苦笑いをうかべた。これが元気な頃の彼との最後になってしまったのである。

我々英語関係の教員もその後年齢がすすみ，また野球をやろうなどという機運は以前のようにはもりあがらないのが残念だ。最近は個人主義でテニスである。私は兼谷さんを偲んでまたマウンドに立ってみたい。しかしそのときバックスから彼の声がかからないのは淋しいことだろう。そして「いい人なんだね」と言ってくれるような人ももういないことだろう。

兼谷英夫先生を悼む

吉　沢　栄治郎
（短大英文科）

兼谷先生に初めてお目に掛かったのはかれこれ15年程前になりましょうか。当時，先生は博士課程に居られ，良き先輩として，小生は何くれとなくお世話を頂きました。その頃，論文をものする要領が皆目分からず，困り果てていた折に，「吉沢君，フラグメント（断片）を集めていったらどうですか。」との親身なアドバイスを頂戴して以来，少しずつ書き方の勘所を覚えていったように思います。いまだ論稿には手を焼いていますが，兼谷先輩の適切なヒントをケンケンフクヨウしつつ，小生なりに牛の歩みを続けてこられたことを今に感謝しています。

さて，兼谷先生とはたびたび野球大会でご一緒しましたが，いつの間にかピッチャーズ・マウンドに立ち，快速球をビシビシ決めている雄姿は今も目に焼きついています。

先生のご立派な点は，たとえブロックが目の前にあろうとも，ひるむことなく，むしろそれを楽しみに転換されてしまう明朗性と意志力にあると思います。いわゆるポジティヴ・シンキング（積極思考）を真に体現しておられ，亡き今も，その身内から発する情熱のほとばしりを感得出来るほどです。

先生は新進気鋭のコールリッジ学者として将来を嘱望されておられましたが，今，その志を半ばにして，幽明境を異にしてしまわれた。が，一面，心身両面において完全燃焼されたのではなかったか，と拝察いたします。

ご遺族の方々の悲嘆はいかばかりかとご同情に堪えませんが，兼谷先生の不退転の精神をひきつがれて，雄々しく生き抜いていかれますよう切に祈るものです。　合掌。